

賢師の解了に便せんとす。

一、外相承圖解左の如し。(三圖四師)

天竺釋迦牟尼佛(等外總付 屬累品)……本化、迹化、他方等總付

支那天台大師(道悟)……縮遺文九二四、二〇七二、

日本傳教大師(開藏唐)……全 一〇七〇

日本日蓮聖人(依經)……全 八〇二、九二三、

二、内証相承の圖解を示さば

本地塔中之釋迦牟尼佛(塔中神力別付虛空會上 止迹召本)……縮九四三

下方空中之上行菩薩(塔中面奉 本法相承)……遺文一四五〇、九四八

本化日蓮大聖人(開顯妙土 本法傳弘)……縮遺文二〇〇三下

三、両相承に就いての注意條項左の如し。

一 外相承所立の釋尊與内証相承所立之釋尊之分別。

二、外相承所立は本宗正に非ず是れ一應準備として設立す故は當家を以て中心とせる所談也。

三、外相承は天台總付を代表し内相承は當家別付を意味するものなる事を確知す可き也。

本迹一致勝劣を論ずる所以

荒木經明

本迹の一致勝劣を論ずるは能判の一途より勝劣を立て所判の理より一致を顯す者とす

抑も吾祖の盛んに本迹勝劣を論じ給ふは爾前迹門の人々をして迹門の妙法を知りて本門の妙法を知らざる者の爲めに特に本門超勝なる妙法の存在する事を知らしめんが爲めちり譬へば地の徳を知りて天の徳を知らざる者の爲めに天の貴きを示し母を知りて父を解せざる者に父の貴きを示すが如きなり然るに超勝なる本門の妙法の顯されて還て迹門の妙法を捨つるは天の貴きを知りて地を卑み父の尊貴を解して後母を捨つるが如きに至りては豈に邪謬ならず耶豈に不孝の者ならず耶故に吾祖

總勸文鈔に示して

『今迹門を開じて本門を攝して一妙法を成ず』

(縮遺一九〇九) 是れ天徳を本として地用ある如く父を元として母の存在を觀る如く心を主として身の用ある如く本迹二門は相憑り相俟つて一妙法を成ずるに至るの意なり

即ち能成に二を主じ所成に一を成するは此處に在りて所成の上より天地色心の如く一妙法に歸して勝劣無しと雖も能成を論る上に於て勝劣の生ずるなり故に吾祖の本勝迹劣は約教の上より一致を立て約宗の上より絶体に勝劣を論じ給ひしかり

若し約宗の台當両家の異相を判じ給はずんば我宗と天台宗との差別彰れず従つて像法の時機に適應せる唯迹一部の法華經が末法の世に既に不適當たると共に何等の効果をも與へかき事を判然する能はず故に吾祖は此の時に當り本化上行菩薩の再誕として唯本一部の法華經を弘めて像末の本勝迹劣を判せられたるかり台祖と吾祖と遠く其本を討ぬれば本化迹化位別あり總付別付人法天かに殊あ

り近く其迹を尋ぬれば像法末法理觀事觀道同じからずして機教永く別なり到底別頭の教化に堪へざる立場を以ての台祖の弘通せられたる唯迹一部の法華經より遙かに超越したる唯本一部の法華經を顯揚せんが爲めに頻りに本迹の高下淺深を判じて本勝迹劣を論じ給ひしなり故に祖文諸處に迹門無得道と廢捨し在るは決して法華一經前半十四品を指示するに非ずして唯迹一部に在る事を知らざるべからず

觀心本尊得意鈔に曰く

『所詮在在所所に迹門を捨てよと書て候事は今我等が讀む所の迹門にては候はず叡山天臺宗の過時の迹を破して候也縱ひ天臺傳教の如く法のまゝに弘通ありとも今末法に至ては去年の曆の如し』 縮遺一三三〇

尙ほ『四菩薩造立鈔』(縮遺一八五七)の如きは明かに祖判の只本一部只迹一部としての本勝迹劣の元意を知るべし

如斯く約宗の上より臺當の本勝迹劣を論じて到

底一致不可能なりと雖も約教の己顯の上の本迹二門に於て淺深を議せざる事前述の如きにして因果体用圓因圓果は偏に廢すべからずして遂に一妙法に歸して常に兩門雙美の妙法を顯し二理常に存し本迹俱に本有の妙法に歸入する事を知るべし授職灌頂鈔に示して曰く

『本迹の高下勝劣淺深は教相の所談也今ま其義を用ひず』

十法界鈔

縮遺二八六

本尊得意鈔

縮遺一三三〇

四菩薩造立鈔

縮遺一八五四

等の祖文を併せ拜せば『口傳抄』は觀心一致を明して一部讀誦の得意を示し『十法界抄』は四重與廢を明して在世轉入の教相を示して一致を明し『得意抄』は台家過時の法を破するの意を顯すとも吾祖所弘の法華は遂に一致なる事を明し『造立抄』は一代聖教三種教相を明して二門の淺深は時と機とに依る事を示して本迹の一致を顯す

如斯く本迹に約宗の上よりは永く勝劣を成し約

教の上よりは兩輪雙翼の如くにして一妙法を顯して一致を所成する者とす要を擧ぐれば本迹二門の高下勝劣は未開の前に在り二門の一致は顯本の己後に存在する事と知るべし

聖祖の御人格

猪 口 古 童

全世界の人に我が國の理想の最も偉大なることを、代表的に仰がせ、且つ、知らせるものは、我が國の中央から、亭々と無限の天空を貫き、萬嶽の上に表はれ而も泰然と聳るてゐる富士の神嶺であらう、仰げば彌々高く容易に近づくこと得難いやうである、しかし其の中には、清泉洋々と流れ、芳花馥郁と馨うばし、孤蝶も翩々として樹の下に舞ひ狂ひ、奇鳥も嚶々と深谷に朗歌するをぞ、誠に一笠の山とは云へ、泰山は斯様に所有風光を具へてゐる、往昔から偉人の風采も亦此の様なものではあるまいか、今私が芙蓉の雄姿を仰いで只管聖祖